

月刊

2016

7
月号

みんぱく

特集

変貌する 中央・北アジア

自然とともに生きる人びと 藤本透子

オアシス都市の暮らし 寺村裕史

三世代にわたって使われたゆりかご 藤本透子

レッドコーナー 小長谷有紀

グローバル社会を生きる新しいモンゴル像のために 島村一平

現代モンゴル遊牧民のゲル 堀田あゆみ

シベリアの自然と文化 佐々木史郎

極北の民チュクチのふたつの顔 池谷和信





『博物館とわたたくし』

森薫

プロフィール
 もりかおる / 1978年東京生まれ。
 漫画家。「乙嫁(花嫁)」をテーマに19世紀半ばの中央アジア地域を描く『乙嫁語り』を漫画誌「ハルタ」(KADOKAWA)で連載中。マンガ大賞2014を受賞。
 主な作品に、2005年、第9回文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞を受賞した『エマ』や『シャリー』シリーズ(ともにKADOKAWA)など。

月刊 みんぱく

7月号目次

- | | |
|--|---|
| <p>1 エッセイ 千字文
博物館とわたたくし
森 薫</p> <p>2 自然とともに生きる人びと
藤本 透子</p> <p>4 オアシス都市の暮らし
寺村 裕史</p> <p>5 三世代にわたって使われたゆりかご
藤本 透子</p> <p>6 レッドコーナー ——人びとが経験した社会主義の生活文化
小長谷 有紀</p> <p>7 グローバル社会を生きる新しいモンゴル像のために ——象徴財、ナショナリズム、宗教
島村 一平</p> <p>8 現代モンゴル遊牧民のゲル ——見せない収納から見えるもの
堀田 あゆみ</p> <p>シベリアの自然と文化 ——資源を持続的に利用するための戦略
佐々木 史郎</p> <p>9 極北の民チユクチのふたつの顔
池谷 和信</p> | <p>10 OOLでみました世界のフィールド
トルコ、重層した歴史の大地を走る
新免 光比呂</p> <p>12 みんぱく Information</p> <p>14 味の根っこ
ニョツキ
宇田川 妙子</p> <p>16 文化遺産おもてうら
パンチエン遺跡ブームとその後
中村 真里絵</p> <p>18 手芸考
主婦と職人のあいだ ——手工芸は手芸か、工芸か?
中谷 文美</p> <p>20 ながなんぢゃ
手話の名前の付け方
相良 啓子</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|--|---|

変貌する 中央・北アジア

ユーラシア北東部の広大な空間をしめる中央・北アジア。多様な民族が行き交うなかで育まれた文化は、社会主義を経験した後、あらたな展開をみせている。リニューアルした展示を中心に、中央・北アジアに生きる人びとの今を紹介する。

夏のカザフ草原。カザフスタン、2003年

自然とともに 生きる人びと

藤本透子
民族文化文化研究部

雄大な自然環境のなかで

中央・北アジアを特徴づけるのは、北からツンドラ、タイガ、ステップ、そして砂漠とオアシスの順に帯状に分布する、雄大な自然環境である。この多様な環境に適応しながら、シベリアではトナカイ飼育や海獣の狩猟など、モンゴルや中央アジア北部のステップではおもに牧畜、中央アジア南部のオアシスでは川や泉の水を利用した農耕などがおこなわれてきた。

季節を追いながら、人びとの暮らしを垣間見てみよう。冬は氷点下の日が続き、特にシベリアでは気温はマイナス五〇度以下にも達する。夏のあいだぬかぬかでいた湿地はすっかり凍り、そりなどで遠方まで移動できるようになる。厳しい寒さのなか外出するときには、念を入れて暖かな服を着こむ。外套ばかりではなく、耳や首まで暖かく覆ってくれる帽子も必需品で、キツネやテンの毛皮などから作られる。野生ヤギやアザラシの毛皮、そしてフェルトなど、身近な素材に工夫を凝らしたブーツと靴下も重要である。冬は、こうして凍てつく寒さつきあいながら装い、親戚や友人たちを訪ねて談笑する季節でもある。中央・北アジアの春は一気に訪れ、花々が咲き乱れる。野生動物も家畜も、出産と子育ての時期である。夏には、中央アジア南部のシルクロード沿いは五〇度以上にもなる灼熱の日が続く。強い日差しのもとで、美しい刺繍を施された絹や綿の衣装と帽子はひととき目を引く。早朝から人びとは水路や綿花畑で働くが、昼過ぎには道を行く人もまばらである。夕方にはぶどう棚の下で、談笑しながら仕事している姿がよく見られる。夏から秋にかけて、オアシスでは



新しくなった中央・北アジア展示「自然との共生」セクション。各地域の帽子と靴を集めたコーナー

杏やざくろが実り、はなやかな結婚祝が続く。季節によって寒暖の差がはげしいこの地域で、人びとは自然とともに生きてきた。新展示の冒頭「自然との共生」セクションで公開するさまざまな帽子と靴は、自然に適応して営まれてきた人びとの暮らしを端的にあらわしている。

時代の変化と展示

みんなばくに中央・北アジア展示が開設されたのは一九七九年のことで、当時はシベリアと中央アジア五カ国は旧ソ連の一部、モンゴルも社会主義政権下にあった。外国人による調査はほぼ不可能で、人びとの暮らしに直接ふれる機会は少なく、生活用品などの収集もおもに博物館や研究所をとおしておこなわれたと聞く。

現地調査の扉が徐々に外国人にも開かれたのは、一九九〇年前後からである。日本人による調査も少しずつさかんになり、社会主義時代の近代化とその後の市場経済化によって人びとの暮らしが急速に変化し、自然と共生していく社会のあり方があらためて模索されていることも明らかとなってきた。

こうした状況の変化をふまえて、新展示では「自然との共生」「社会主義の時代」というふたつの共通テーマと、「中央アジア」「モンゴル」「シベリア・極北」という地域別のセクションをもうけた。収蔵庫に眠っていた資料に、新しく現地の人々から直接収集した多数の資料を組み合わせることで、中央・北アジアの尽きせぬ魅力を表現している。



左上：トナカイソリの列。ロシアサハ共和国、1998年。撮影・佐々木史郎
右上：チュクチの子どもたち。ロシアチュコトカ自治管区、1997年。撮影・池谷和信



左：専用の竿（オールガ）でウマを捕らえる。モンゴル、2011年
右：8月の朝、放牧前のヒツジ、ヤギの群れ。モンゴル、2014年
2点とも撮影・辛嶋博善



左上：ざくろ柄のウズベク/タジクの帽子。ウズベキスタン、2014年
左下：トルクメンの帽子。ウズベキスタン、2013年
中央：カザフの衣装。カザフスタン、2004年
右：キツネ毛皮の帽子（イヌワシを使った狩りの衣装の一部）。カザフスタン、2014年。提供・T.カルシベコフ

オアシス都市の暮らし

寺村 裕史

民博文化資源研究センター

人はオアシスに集う

「オアシス都市」ということばから、みなさんはどういった風景を思い浮かべるだろうか。気候的に乾燥した環境が多い中央アジアでは、生活するうえで必要不可欠な淡水が得られる場所（「オアシス」）に人が集まり、街や村が形成されてきた。現在でも、大きな河川から運河（用水路）で街や村のすぐそばまで水を引き、その水を利用した綿花栽培や穀物・果物などの食料生産がおこなわれている。

そうしたオアシス都市の風景のなかで、ウズベキスタン・サマルカンド近郊の村の民家の中庭に、立派なぶどう棚が作られているのが目を惹いた。水はけが良く日当たりを好むぶどうの樹は、中央アジアの気候に適している。ぶどうの実はそのまま食べる場合もあるが、保存性



サマルカンド近郊の民家の中庭に作られたぶどう棚の前で（お世話になった家のご家族）

を高めるため乾燥させてドライフルーツにすることも多い。バザールに行けば、ぶどうや杏などのドライフルーツが山積みになれ、クルミやピスタチオ、アーモンドといったナッツ類も所狭しと売られている。これも乾燥地ならではの光景といえよう。



サマルカンドのバザールで店先に並べられたドライフルーツ（ぶどう・杏）、クルミなどナッツ類

また、この地域の民家では、部屋の建物を「コの字形（あるいは口の字形）」に配し、空いた真ん中の空間に樹を植え木陰を作つてその下に縁台を置き、そこでお茶を飲むなど団欒の場が設けられているのをよく見かける。お茶と一緒に、皿に盛つたドライフルーツやナッツが饗され、涼しげな木陰の縁台でのんびりとした時間を過ごす。干しぶどうとクルミを一緒に口に入れれば、ぶどうの濃厚な甘みとクルミの淡泊な味が混ざつてとても美味しい。

風景に思いをはせて「中央アジア」セクションの「オアシス都市の暮らし」では、ウズベキスタンの台所や民家の内部が実寸大で復元され、パン焼きかまどや調理具、茶飲み道具などの食器、パンや盛り付けられたドライフルーツなど、現地の生活を直に感じとれるような展示がなされている。また、一九八〇年代初頭に製作されたタシュケントの民家模型も、色を付け直すなどして装いがあらたになつている。民家模型は、見た目の派手さはないかもしれないが、建物・部屋の造りやぶどう棚の造作、葉っぱ一枚一枚までこだわつて精細に作られており、現地の人びとのその家での暮らしぶりを想像しながら、模型を眺めるのも楽しいだろう。さらに「職人の世界」では、青色が鮮やかな陶器の皿、愛嬌のある人形など、現地の職人のこだわりが伝わってくるような資料がたくさん展示されており、見所は多い。



タシュケントのバザールで売られていた陶器の皿や人形

三世代にわたって使われたゆりかご

藤本 透子

民博民族文化研究部

三世代にわたって使われたゆりかご H0277439



語る生活用品

カザフスタンの草原の村に、二年ほど住ませてもらったことがある。新展示にあたって、その村の人たちの協力を得て資料を集めた。「中央アジア」セクションの「カザフ草原の暮らし」「イスラームと人生儀礼」というふたつのサブセクションを構成するため、衣類、食器、敷物、楽器など六〇点あまりを同じ村で収集する過程で、少しずつ見えてきたのは村人たちのライフヒストリーだった。例えば、木製のゆりかごは、一九五四年生まれ

の男性サヤンのために作られ、彼が結婚して一九七三年に長男が生まれると再び使われ、さらに一九九七年生まれの孫息子も使った。ゆりかごの寝台部分にはおまる用の穴があげられていて、骨製の管をおして排泄することで赤ん坊はいつも清潔で眠つていられる。サヤンは、ガレージの奥にしまわれていたゆりかごのほこりを払って修理し、ヒツジの骨でゆりかご用の管も作つてくれた。サヤンの妻は、このゆりかごにナツメヤシ製の数珠をお守りとして付けて使っていたという。ナツメヤシは、かつてはメッカ巡礼した際などにしゅか手に入らない貴重なもので、食べた後の種も数珠にして大切にされた。サヤンの家で礼拝する際に使っていた数珠は、一部がかけてしまった後も護符として使われていたのである。

家族の歴史を展示する

いろいろなものを見せてもらっているうちに、サヤンの妻は衣装箱からキツネ毛皮の外套も出してきた。草原で狩猟されたアカギツネの毛皮をなめして、足の黒い模様美しい部分を連ねて作られている。親戚の女性が長寿をまつとうして亡くなったときに形見わけされて、大切にしていたが古くなったのでしまっていたという。

このように家族の歴史が刻



ゆりかごを使っていた家族とその親戚たち。2013年



「中央アジア」セクションの「カザフ草原の暮らし」の展示。村で収集した資料などから構成している



キツネ毛皮の外套。ある長老女性の形見。H0275268

れた人たちもいる。はるばる日本までやってきたカザフ草原の生活用品は、少しかけたり破れたりしているが存在感がある。本来使われていた場所を離れ展示場という空間に置かれても、生活用品が何かを語りかけてやまないのは、それを作り使っていた人たちの思いが込められているからに違いない。

まれたものを、わたしとはできないと言った人もいた。その一方で、「子や孫の世代になつたらぎつと捨ててしまおう。それよりは、博物館でたくさんの人に見てもらえたら」と協力してく

レッドコーナ―

人びとが経験した 社会主義の生活文化

小長谷 有紀 民博 民族社会学研究所



共産党少年組織ピオネールのバッジ。H0275257

社会主義がもたらしたこと

ユーラシア大陸の中緯度および高緯度地帯に位置する、中央・北アジアは、かつてソビエト連邦の一部とされるか、もしくは政治的に強い影響を受けた。社会主義の理念のもとで近代化がおしすすめられたので、生活文化の多様な側面が広く共通することとなった。

例えば、文字と言語。諸民族の言語はキリル文字であらわされ、現在もなお使用されており、公用語としてのロシア語は現在も広い範囲で通用する。みんぱくの旧展示場で、ウランバートルのアルマータとするされていたのは、偶発的な誤りだが、この誤りにはそもそも理由がある。文化施設の設計図が国境を越えて共通していたからである。各家庭では、それまで神仏の像が置かれていた部屋の片隅などに、社会主義革命を先導したレーニンの像や著作などが掲げられ、レッドコーナ―として生まれ変わった。そんな歴史をたどるかのように、みんぱくの展示場にも、新しく「社会主義の時代」のコーナーが登場した。もちろん、崇拜するためでもない

れば、追憶するためでもない。現在を知るための知的基盤として構成された一角である。

こぼれでる「赤」

背景に展開する写真のセピア色は、社会主義時代の卒業を象徴している。科学研究費助成「モンゴル・中央アジアにおける社会主義的近代化に関する比較研究」(二〇〇九〜一四年)による収集に加えて、友人知人からの提供写真からなる。ウズベキスタンで活躍した写真家マクス・ペンソンの作品も含まれる。

セピア色のなかに点在する赤色はリアルなモノとして展示場にこぼれでる。とりわけ存在感を放つのが、レーニンの肖像が描かれた赤い旗。国営農場で使われていた。こんなふうな旗やバッジに描かれていた革命の英雄は現在、伝統工芸品マトリョーシカ人形で再利用され、みやげものとして生きている。

女子学生の制服や各種のバッジからは、社会主義のもとでの生活文化の画一性が了解されると同時に、諸民族における伝統や文化の多様性をうかがい知ることができよう。社会主義の「ポバガンダ(宣伝文句)」を発していたラジオは、部屋の隅におさまるよう取り付けられていたため、三角形をしている。モスクワ製の手動の髭剃りは「スプートニク(衛星)」という大げさな名前で、衛星のように円錐形をしている。生活用品の技術開発よりも、宇宙開発競争に明け暮れた時代をまさに体現しているではないか。

1. ソフホーズの旗 H0275677
2. マトリョーシカ H0277088
3. 女子学生用制服 H0277670ほか
4. ラジオスピーカー H0277383
5. 髭剃り H0277675
6. 「10月革命記念」ポスター

背景：中央・北アジア展示「社会主義の時代」セクション



グローバル社会を生きる 新しいモンゴル像のために

― 象徴財、ナショナルリズム、宗教

島村 一平
滋賀県立大学准教授

プライド競争社会

あてやかな大モンゴル帝国時代の民族衣装。少し古風な匈奴風の衣装。新しく収集したこれらの衣装は、単なる伝統的な民族衣装ではない。じつはグローバル化するモンゴルの都市社会で、象徴財として着られるようになった「再現衣装」なのである。素材もじつにグローバルで、インド製のシルクやチエコ製のリンネル(亜麻布)などが使われたりしている。

近年、経済発展の著しいモンゴルでは、資本主



モンゴル仏教寺院内にある、料金支払いのためのATM。お金を払って浄水を受け取る



厄除けの読経

宗教が写す世相

現代モンゴルの宗教に関する資料も収集した。モンゴル仏教のラマたちは、日本の神社より厄除けの読経儀礼をおこなう。こうしたラマの読経は、神道同様に料金表ができてあがっている。人びとは厄除けや仕事の成功のために足繁く寺院に通い、ときには布施に大枚をはたくことも厭わない。

また社会不安や過度な競走社会を背景に



大モンゴル帝国時代を再現した盛装
男性用衣装 H0277299ほか
女性用衣装 H0277302ほか

シャーマニズムも興隆している。おそらくモンゴル国の人口のパーセント近くが、シャーマンとなっている。彼らは、仕事の不成功や家族の病気や交通事故をきつかけに、シャーマンに相談に行く。ところが降りかかった災厄はシャーマンになるべき運命であることの証だと告げられ、相談した者たちがあらたにシャーマンとなるわけである。興味深いのは、やはりシャーマンの霊にも王侯貴族の位階があたりすることである。収集したシャーマンの帽子も、かつての貴族の帽子をアレンジしたもので、頭頂にモンゴルの国章「ソヨンボ」がついたものとなっている。もちろん、こうしたナシヨナリステイックなシンボルは、かつてのシャーマン帽には見られなかったことは、いうまでもない。

かつてソ連型社会主義は「形式において民族的、内容において社会主義的」な文化建設を目指したところが、現代のモンゴル文化は明らかに「形式において民族主義的、内容においてグローバル資本主義的」になりつつある。

現代モンゴル遊牧民のゲル

— 見せない収納から見えるもの

堀田 あゆみ

民博 外来研究員

備えつけのバラボラ・アンテナ、発電中のソーラー・パネル、家長の在宅を知らせる中型バイク……。これらに目をやりながら、開け放たれた扉をくぐってゲルに一步足を踏み入れると、整然と配置された家財道具が来訪者を迎える。



戸口から見たゲルの内部。モンゴル国アルハンガイ県にて。2010年。「モンゴル」セクションにて再現・展示。H0269572ほか

本展示で演示されているゲルは、モンゴル国アルハンガイ県で実際に使用されていたものである。室内を隙間なく家具で埋め尽くす冬から春にかけてのしつらえを再現しており、家具のみならず、雑貨の配置もすべて、遊牧民一家の実践にならっている。きれいに片づいて見えるこの空間が一体何を物語るのか。

季節ごとに住居を移す遊牧生活においては、必要最小限のモノしかもたないとい般にいわれてきた。しかし、四大家族であるこの遊牧民世帯には、ゲルの内外にあるモノすべてを含めて、およそ二五〇〇点が存在していた。つまり、室内が整然としているのはモノが少ないからではなく、モノが見えないところに収納されているからである。むしろ、見えているモノはあえて見せているモノということであり、ゲル内は住人によって常に演示されているといえる。

なぜなら、ゲルは家族の生活空間であると同時に、来訪者を迎える社交空間としての役割をあわせもつからである。他家を訪問しさまざまな情報を交換することを日課とする遊牧民にとって、他家の持ち物も収集すべき重要な情報となる。見せない収納からは、社交性に長けたモンゴル遊牧民の情報管理の知恵が垣間見える。

シベリアの自然と文化

— 資源を持続的に利用するための戦略

佐々木 史郎

国立アイヌ民族博物館設立準備室主幹

一般的にシベリアは極寒の地で自然環境がきびしく、人びとはそのなかでかろうじて生きているという印象が強いが、決してそのようなところではない。陸にも海にも狩猟対象となる動物があふれ、川には魚をはじめとする水産資源が豊富で、森や野原には有用植物が多数ある。それらをうまく利用すれば、相当豊かな暮らしができる。今回の新展示ではあらためてその豊かな自然をたくみに利用してきたシベリア先住民たちの暮らしの一端を紹介することにしたい。そのため、ツンドラ地帯のトナカイ遊牧について（コリヤークとチュクチの文化）、大川川の漁撈を中心とする暮らしについて（極東ロシアのアムール川流域の文化）、そして精霊とシヤマニズムの世界という三つを柱として展示を構成した。それにより豊かな自然を人びとがどのように利用し、認識していたのかを示した。

トナカイそりや白樺樹皮カヌー、わな類、毛皮衣服などからなる展示をつくりあげてみると、自然のなかで暮らすとされるシベリア先住民たちの資源利用のたくみさ、したたかさもよく見えてきた。彼らはそれらをいかすために、貪欲に新しい技術や用具、エネルギー源を導入し、伝統的な知見、知識と融合させて、その文化をバージョンアップさせてきたのである。しかしそれでも、自分たちの生活の基盤である自然はこわさないし、よごさない。そこには自然の恵みを持続的に利用することを忘れた我々にとって学ぶべきことが多い。



中央・北アジア展示「シベリア・極北」セクション

極北の民チュクチの

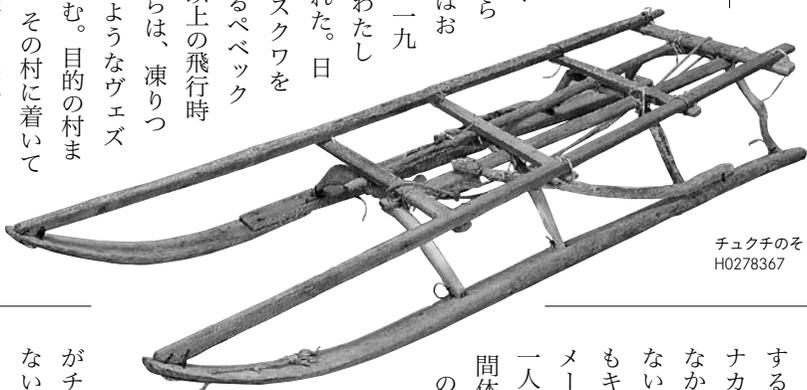
ふたつの顔

池谷 和信

民博 民族文化研究部

対照的な暮らし

チュクチは、わが国ではエスキモーのようにはあまり知られていないが、ツンドラに暮らす人びとである。人口はおよそ二万人にもものぼる。一九七一年一〇月下旬に、わたしははじめてこの地を訪れた。日本からロシアの首都モスクワを経由して北極海に面するペベックまで、のべ二〇時間以上の飛行時間を費やした。そこからは、凍りついたツンドラを戦車のようなヴェズジフオートに乗って進む。目的の村までには、数時間かかる。その村に着いて驚いた。若い女性は現代的な毛皮のコートを身に着けていた。火力発電所があり電気は利用でき、複数階のアパートでの近代的な暮らしがなされていた。わたしたちの暮らしとは変わらない。困ったことといえば水の入手である。氷をとかして水を得るために時間がかかるためだ。



チュクチのそり H0278367

一方で、村のなりわいであるトナカイを飼育するキャンプの暮らしは別世界であった。マイナス三〇度の気温のなか、村からスノーモービルに乗り数時間かけて、二千五百頭近いトナカイを飼育するキャンプに移動する。テントは二〇枚近いトナカイの皮でおおわれヤランガとよばれていた。なかは薪ストーブがあり暖かい。彼らは厚着をしない。一枚のトナカイ製の衣服のみだ。しかもキャンプにはトナカイはいない。そこから数百メートル離れたところで、採食をしているのだ。一人の牧夫が、オオカミによる害を恐れて二四時間体制で監視をしていた。現在でも、ツンドラでのトナカイ遊牧は健在である。そこでは、「伝統的な暮らし」が維持されていると思った。

国家のなかに生きる

だが、その後、いわゆる遊牧という生活様式とは事情がどこか違うことに気が付いた。遊牧民ということばがチュクチにはあまりなじまない。彼らは、トナカイとともに遊動すると同時に、中心の村につくられたアパートに自分の部屋をもっている。しかも、わたしが滞在した村では現在でも国营農場ソフホーズの解体は進んでおらず、ト



トナカイ飼育をする男性



村の中心地で見かけた女性たち

トナカイ飼育は国营のままであった。その結果、トナカイの群れはすべて国が所有しており、チュクチの牧夫は国から給料をもらっていた。キャンプではトナカイ肉をごちそうになったが、その分は給料から引かれることになるのだ。「シベリア・極北」セクションでは、このような伝統と近代というふたつの顔をもつ現在のチュクチの暮らしが紹介されている。わたしが現地で見集めたものからはトナカイ飼育の伝統文化を、展示資料の前に置かれたマルチメディア機器の写真からは、チュクチの近代的な暮らしを垣間見ることができよう。来館者は、トナカイ遊牧民がどのように国家のなかに組み込まれてきたのか、ロシアという旧社会主義国のなかでのマイノリティの生き方を知ることができると考えている。

トルコ、重層した歴史の大地を走る

新免 光比呂 民博 民族文化研究部



長距離バスに乗ってみました

長距離バスと人びと

東西 1600 キロメートルにおよぶ広大な大地をもつトルコ。かつての帝国の地を偲ぶ筆者を待ち受けていたのは、思いのほか快適な長距離バスの旅だった。

もう一〇年以上前のことになる。長年の夢だったカッパドキアの奇岩とキリスト教徒の地下都市を訪れた。時は新年を迎えようとしており、イスタンブルの空港は人びとでこったがえしていた。それでもなんとか飛行機にたどり着き、一時間のフライトで無事にカッパドキアの空港に降り立った。

歴史の宝庫

カッパドキアには、柔らかい地層と硬い地層が重なり侵食した結果、キノコのような形をした不思議な巨岩が乱立している。また隠れ家として岩を削って内部に住んだ初期キリスト教徒にならった独自の住居がある。



カッパドキアを走る長距離バス

カッパドキアの訪問が慌ただしく終わると、遠く離れたイスタンブルまで戻らねばならない。だが飛行機で帰るのはもったいない。トルコの大地には、コンヤ、イズミル、チャナッカレ、エディルネなど、歴史的な都市がたくさんある。では長距離バスに乗ろう。トルコを半周する旅の始まりである。

いざ、乗車

トルコで長距離バスというのは、至極便利で簡単な乗り物である。たくさんの町がバス路線で結ばれており、その町のはずれにバスターミナルがある。チケットをターミナルで購入し、バスを待つ。時間どおりにバスがやってくる。さて、どの席にしようかと物色するが、どの乗客もチケットを見ながら席を探している。「えっ、席が指定されているの?」。それまで地中海沿岸、バルカン地域で長距離バスに乗ったことはなかあるが、指定席を守っている人はあまり見たことがなかった。見晴らしの良い前の座

席に座りたかったが、しかたがない、真ん中あたりの席に座る羽目になる。そして、驚いたことがもうひとつ。バスの運転手以外に若者がバスを出たり入ったりしていた。バスが走り出すと、彼はレモン・コロンとお菓子をもちて乗客のあいだを回るので。そしてチャイ。なんと気が利いているのだろう。長いバス旅もなんだか楽しくなってきた。

イスタンブールへの道草

最初の停留地コンヤはトルコ内陸アナトリア地方の主要都市のひとつで、パウロがキリスト教の布教に訪れた。現在では、イスラーム神秘主義者ルーミー（メヴラーナ）で知られる。二七三年に亡くなるまでコンヤで活動し、トルコを代表する神秘主義教団メヴレヴィー教団を開いた。ルーミーの墓廟はオスマン帝国期には教団道場として使われていたが、一九二七年、世俗主義を主張するケマル・アタテュルク政権によって神秘主義教団は解散させられ、廟も閉鎖された。現在はメヴラーナ博物館として一般公開されている。



コンヤのルーミー廟



トルコ、イスタンブール

次の停留地イズミルは、エーゲ海に面する都市で、古くはスミルナとよばれた。イスタンブールに次いでトルコ第二の規模の港湾都市で、近くにはエフェソス、ベルガマ（ベルガモン）などの古代遺跡もある。考えてみると、これらはみなギリシャの遺跡である。その遺跡を我が物としているのも、遊牧の民の末裔ならではないかという気がする。

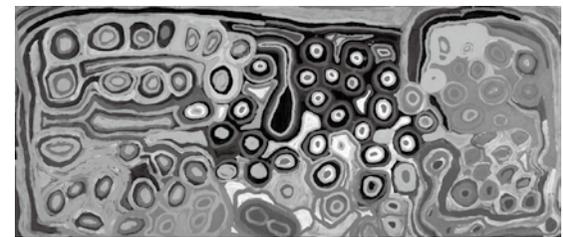


エフェソス遺跡

三番目の停留地チャナッカレは国土の北西に位置する。アジア・ヨーロッパにまたがり、ダーダネルス海峡を挟んだ海峡交通の要所である。トロイの木馬で有名なトロイ遺跡観光の拠点である。観光客も多いが、なんとなくヨーロッパを感じさせる港町である。最後の停留地エディルネは、トルコの最西端に位置し、ヨーロッパ側の東トラキア地方の国境地帯に横たわる。市街中心部からギリシャ国境まで五キロメートル、ブルガリア国境まで一〇キロメートルの国境の町である。ちょっとギリシャ、ブルガリアを覗いてみたかったが、タクシー代が高く泣く泣く諦めた。イスタンブールからの長距離バスなら楽に越境できるのだが。

帝国の周辺と中心

筆者のフィールドであるルーミアから見るとイスタンブールは、はるかかなたに位置していると感じられる。だが、イスタンブールから見るとルーミアはすぐそこである。この眼差し（まなざし）の落差というのは、帝国（オスマン）というものの本質に根差しているのだろうか。中心から見ると帝国の内側に秩序づけられている。しかし、辺境の当事者は帝国を意識することとはなく、たんなる異形の支配者としてしか考えない。重層した歴史に向き合うと、人はにわか思想家になりがちである。長距離バスで走り抜けたトルコの大地は、あまりにも広く深く歴史に根差しており、乗り物酔いならぬ歴史酔いに襲われてしまった。



〈クンクン〉Kunkun 2008年
ノラ・ナンガバ、ノラ・ウォムビ、フガイ・ワイロウタ、クムバヤ・ギルガバ
(マトゥミリイ・アーティスト) オーストラリア国立博物館蔵

中央・北アジアを駆けめぐる
夏のみんぱくフォーラム2016
6月16日(木)の新展示オープンを記念し、イベントを開催します。

◆関連イベント
◆みんなく映画会「映画で知る中央・北アジア」
7月9日(土)
7月18日(月・祝)

「山嶺の女王 クルマンジャン」
「くろみの木」
時間 13時30分～16時30分(13時開場)
会場 本館講堂(定員450名)
※申込不要、要展示観覧券
※本館2階観覧券売場にて当日11時から入場整理券配布
※11時30分より中央・北アジア展示場にてミニレクチャーを開催

◆コンサート「音楽をつなぐ中央 北アジア」
7月17日(日)
「サハの口琴」
司会 池谷和信(本館助教)
演奏者 直川礼緒
7月31日(日)
「カザフ草原の調べ」
司会 藤本透子(本館助教)
演奏者 イナナラ・セリクバエヴァ
高橋直己

◆トークイベント
「遊牧民に聞く、モンゴルの暮らし」
7月21日(木)
11時～12時「おもてなし草原流」
14時～15時「チベット仏教のお祈り」
7月22日(金)
11時～12時「おもてなし草原流」

◆展示場クイズ「みんなQ」
中央・北アジア編
7月21日(木)～8月23日(火)
連続講座
「みんなく×ナレッジキャピタル——世界の台所」
好評につき大阪・梅田のナレッジキャピタルで第4弾を開催!
時間 19時～20時30分
会場 グラフフロント大阪北館1階
ナレッジキャピタル「カフェラボ」
※要事前申込、参加費500円(1ドリンク付き)、定員各回50名
主催 国立民族学博物館
一般社団法人ナレッジキャピタル
7月6日(水)
ムスリムの肉食、キリスト教徒の肉食
中東・イスラーム世界の食と宗教
講師 菅瀬晶子(本館准教授)
7月20日(水)
韓国の台所

◆夏休み子どもワークショップ
「カザフのひつじウズベクのひつじ」
フィールドワークに挑戦!
日時 7月23日(土)
10時30分～16時(10時20分集合)
講師 藤本透子(本館助教)
宗野ふもと(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 非常勤研究員)
フアシリテーター 喜多川真由美
(本館技術補佐員)
会場 本館展示場
対象 小学4年生～6年生
※要事前申込(先着順/定員12名、参加費500円)

◆展示場クイズ「みんなQ」
中央・北アジア編
7月21日(木)～8月23日(火)
連続講座
「みんなく×ナレッジキャピタル——世界の台所」
好評につき大阪・梅田のナレッジキャピタルで第4弾を開催!
時間 19時～20時30分
会場 グラフフロント大阪北館1階
ナレッジキャピタル「カフェラボ」
※要事前申込、参加費500円(1ドリンク付き)、定員各回50名
主催 国立民族学博物館
一般社団法人ナレッジキャピタル
7月6日(水)
ムスリムの肉食、キリスト教徒の肉食
中東・イスラーム世界の食と宗教
講師 菅瀬晶子(本館准教授)
7月20日(水)
韓国の台所

◆夏休み観覧無料キャンペーン
夏の観覧無料キャンペーンを8月1日(月)から8月30日(火)まで実施します。対象は高校生以下と65歳以上の方です。

◆「素顔の地球に出会う——人類学者たちのフィールドワーク」
現地におもむき、人びとと暮らしをともにしながらおこなうフィールドワーク。研究論文からはこぼれおちてしまうような、研究成果の舞台裏を、研究者がお話しします。
会場 モンベル渋谷店5Fサロン
時間 各回ともに13時30分～15時30分
参加費 一般各回1000円、会員無料
要事前申込、先着順
9月10日(土)
人間にとってスイカとは何か——カラハリ狩猟民と考える
講師 池谷和信(本館助教)
11月12日(土)
シベリアで生命の暖かさを感じる
講師 佐々木史郎(国立アイヌ民族博物館設立準備室主任)

◆「市民社会」の再編を展望する
※講義終了後、講師を囲んで懇談会を実施します。
第458回 9月3日(土)13時30分～15時30分
ネパール、「市民社会」の再編を展望する
講師 南真木人(本館准教授)

◆「素顔の地球に出会う——人類学者たちのフィールドワーク」
現地におもむき、人びとと暮らしをともにしながらおこなうフィールドワーク。研究論文からはこぼれおちてしまうような、研究成果の舞台裏を、研究者がお話しします。
会場 モンベル渋谷店5Fサロン
時間 各回ともに13時30分～15時30分
参加費 一般各回1000円、会員無料
要事前申込、先着順
9月10日(土)
人間にとってスイカとは何か——カラハリ狩猟民と考える
講師 池谷和信(本館助教)
11月12日(土)
シベリアで生命の暖かさを感じる
講師 佐々木史郎(国立アイヌ民族博物館設立準備室主任)

場所 中央・北アジア展示場 モンゴル天幕
コナー(先着順/定員20名)
※申込不要、要展示観覧券
◆夏休み子どもワークショップ
「カザフのひつじウズベクのひつじ」
フィールドワークに挑戦!
日時 7月23日(土)
10時30分～16時(10時20分集合)
講師 藤本透子(本館助教)
宗野ふもと(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 非常勤研究員)
フアシリテーター 喜多川真由美
(本館技術補佐員)
会場 本館展示場
対象 小学4年生～6年生
※要事前申込(先着順/定員12名、参加費500円)

◆展示場クイズ「みんなQ」
中央・北アジア編
7月21日(木)～8月23日(火)
連続講座
「みんなく×ナレッジキャピタル——世界の台所」
好評につき大阪・梅田のナレッジキャピタルで第4弾を開催!
時間 19時～20時30分
会場 グラフフロント大阪北館1階
ナレッジキャピタル「カフェラボ」
※要事前申込、参加費500円(1ドリンク付き)、定員各回50名
主催 国立民族学博物館
一般社団法人ナレッジキャピタル
7月6日(水)
ムスリムの肉食、キリスト教徒の肉食
中東・イスラーム世界の食と宗教
講師 菅瀬晶子(本館准教授)
7月20日(水)
韓国の台所

◆夏休み観覧無料キャンペーン
夏の観覧無料キャンペーンを8月1日(月)から8月30日(火)まで実施します。対象は高校生以下と65歳以上の方です。

◆「素顔の地球に出会う——人類学者たちのフィールドワーク」
現地におもむき、人びとと暮らしをともにしながらおこなうフィールドワーク。研究論文からはこぼれおちてしまうような、研究成果の舞台裏を、研究者がお話しします。
会場 モンベル渋谷店5Fサロン
時間 各回ともに13時30分～15時30分
参加費 一般各回1000円、会員無料
要事前申込、先着順
9月10日(土)
人間にとってスイカとは何か——カラハリ狩猟民と考える
講師 池谷和信(本館助教)
11月12日(土)
シベリアで生命の暖かさを感じる
講師 佐々木史郎(国立アイヌ民族博物館設立準備室主任)

◆「市民社会」の再編を展望する
※講義終了後、講師を囲んで懇談会を実施します。
第458回 9月3日(土)13時30分～15時30分
ネパール、「市民社会」の再編を展望する
講師 南真木人(本館准教授)

◆「素顔の地球に出会う——人類学者たちのフィールドワーク」
現地におもむき、人びとと暮らしをともにしながらおこなうフィールドワーク。研究論文からはこぼれおちてしまうような、研究成果の舞台裏を、研究者がお話しします。
会場 モンベル渋谷店5Fサロン
時間 各回ともに13時30分～15時30分
参加費 一般各回1000円、会員無料
要事前申込、先着順
9月10日(土)
人間にとってスイカとは何か——カラハリ狩猟民と考える
講師 池谷和信(本館助教)
11月12日(土)
シベリアで生命の暖かさを感じる
講師 佐々木史郎(国立アイヌ民族博物館設立準備室主任)

◆「市民社会」の再編を展望する
※講義終了後、講師を囲んで懇談会を実施します。
第458回 9月3日(土)13時30分～15時30分
ネパール、「市民社会」の再編を展望する
講師 南真木人(本館准教授)

◆「素顔の地球に出会う——人類学者たちのフィールドワーク」
現地におもむき、人びとと暮らしをともにしながらおこなうフィールドワーク。研究論文からはこぼれおちてしまうような、研究成果の舞台裏を、研究者がお話しします。
会場 モンベル渋谷店5Fサロン
時間 各回ともに13時30分～15時30分
参加費 一般各回1000円、会員無料
要事前申込、先着順
9月10日(土)
人間にとってスイカとは何か——カラハリ狩猟民と考える
講師 池谷和信(本館助教)
11月12日(土)
シベリアで生命の暖かさを感じる
講師 佐々木史郎(国立アイヌ民族博物館設立準備室主任)

◆「市民社会」の再編を展望する
※講義終了後、講師を囲んで懇談会を実施します。
第458回 9月3日(土)13時30分～15時30分
ネパール、「市民社会」の再編を展望する
講師 南真木人(本館准教授)

講師 朝倉敏夫(立命館大学教授
本館名誉教授)
◆みんなく展示ツアー
「電気・ガス・水道のない台所」
ベトナム、黒タイ族の村から」
7月18日(月・祝) 13時30分～15時(13時受付)
会場 本館展示場
講師 樫永真佐夫(本館助教)
参加費 無料
※要事前申込(定員30名)
お申込み・お問い合わせ先
一般社団法人ナレッジキャピタル
06-63372-6530

カレッジシアター
「地球探究紀行」
みんなく教員が執筆した臨川書店発行「フィールドワーク選書」を中心にお話しします。
時間 13時～14時30分
会場 あべのハルカス近鉄本店「スペース9」
※事前申込(参加状況により当日受付あり)、参加費各回1000円(定員各回50名)
共催 産経新聞社、近鉄文化サロン、スペース9特別協力 国立民族学博物館、千里文化財団
7月13日(水)
コリアン社会の変貌と越境
講師 朝倉敏夫(立命館大学教授
本館名誉教授)
7月27日(水)
城壁内からみるイタリヤ
——ジェンダーを問い直す
講師 宇田川妙子(本館准教授)
お申込み・お問い合わせ先
ウェーブ産経カレッジシアター係
06-66333-9087

◆夏休み観覧無料キャンペーン
夏の観覧無料キャンペーンを8月1日(月)から8月30日(火)まで実施します。対象は高校生以下と65歳以上の方です。

◆「素顔の地球に出会う——人類学者たちのフィールドワーク」
現地におもむき、人びとと暮らしをともにしながらおこなうフィールドワーク。研究論文からはこぼれおちてしまうような、研究成果の舞台裏を、研究者がお話しします。
会場 モンベル渋谷店5Fサロン
時間 各回ともに13時30分～15時30分
参加費 一般各回1000円、会員無料
要事前申込、先着順
9月10日(土)
人間にとってスイカとは何か——カラハリ狩猟民と考える
講師 池谷和信(本館助教)
11月12日(土)
シベリアで生命の暖かさを感じる
講師 佐々木史郎(国立アイヌ民族博物館設立準備室主任)

◆「市民社会」の再編を展望する
※講義終了後、講師を囲んで懇談会を実施します。
第458回 9月3日(土)13時30分～15時30分
ネパール、「市民社会」の再編を展望する
講師 南真木人(本館准教授)

◆「素顔の地球に出会う——人類学者たちのフィールドワーク」
現地におもむき、人びとと暮らしをともにしながらおこなうフィールドワーク。研究論文からはこぼれおちてしまうような、研究成果の舞台裏を、研究者がお話しします。
会場 モンベル渋谷店5Fサロン
時間 各回ともに13時30分～15時30分
参加費 一般各回1000円、会員無料
要事前申込、先着順
9月10日(土)
人間にとってスイカとは何か——カラハリ狩猟民と考える
講師 池谷和信(本館助教)
11月12日(土)
シベリアで生命の暖かさを感じる
講師 佐々木史郎(国立アイヌ民族博物館設立準備室主任)

◆「市民社会」の再編を展望する
※講義終了後、講師を囲んで懇談会を実施します。
第458回 9月3日(土)13時30分～15時30分
ネパール、「市民社会」の再編を展望する
講師 南真木人(本館准教授)

◆「素顔の地球に出会う——人類学者たちのフィールドワーク」
現地におもむき、人びとと暮らしをともにしながらおこなうフィールドワーク。研究論文からはこぼれおちてしまうような、研究成果の舞台裏を、研究者がお話しします。
会場 モンベル渋谷店5Fサロン
時間 各回ともに13時30分～15時30分
参加費 一般各回1000円、会員無料
要事前申込、先着順
9月10日(土)
人間にとってスイカとは何か——カラハリ狩猟民と考える
講師 池谷和信(本館助教)
11月12日(土)
シベリアで生命の暖かさを感じる
講師 佐々木史郎(国立アイヌ民族博物館設立準備室主任)

◆「市民社会」の再編を展望する
※講義終了後、講師を囲んで懇談会を実施します。
第458回 9月3日(土)13時30分～15時30分
ネパール、「市民社会」の再編を展望する
講師 南真木人(本館准教授)

◆「素顔の地球に出会う——人類学者たちのフィールドワーク」
現地におもむき、人びとと暮らしをともにしながらおこなうフィールドワーク。研究論文からはこぼれおちてしまうような、研究成果の舞台裏を、研究者がお話しします。
会場 モンベル渋谷店5Fサロン
時間 各回ともに13時30分～15時30分
参加費 一般各回1000円、会員無料
要事前申込、先着順
9月10日(土)
人間にとってスイカとは何か——カラハリ狩猟民と考える
講師 池谷和信(本館助教)
11月12日(土)
シベリアで生命の暖かさを感じる
講師 佐々木史郎(国立アイヌ民族博物館設立準備室主任)

味の根っこ

イタリアの団子状パスタ

ニョッキ

宇田川 妙子 民博 民族社会研究部



ローマ地方定番のトマトソースあえのニョッキ。この地域では、パルメザンチーズではなく、羊のチーズであるペコリーノをかける人も多い



イタリアの食材のメイン、トマトの赤が目立つ市場の風景。今でも生鮮野菜は市場で買う人が多い

「木曜日」は「ニョッキ」

イタリアの家庭料理のひとつに、ニョッキという小さな団子状の形をしたパスタがある。おもに小麦粉とジャガイモを使って作る生パスタだ。特にトマトソースとあえたローマ地方のものには有名で、その周辺では「木曜日は「ニョッキ」ということばも耳にする。木曜日にはニョッキを食べるという意味だが、現在もこの習慣は残っている。

その理由は、このことばに続く「金曜日は魚土曜日」はトリッパ（牛の胃袋）にヒントがあるという。金曜日は、キリスト教ではイエスが十字架にかけられた曜日である。このため肉食は避けるべきだとされており、魚料理が食べられていた。わたしが約三〇年前に調査をしたローマ近郊の町でも、内陸に位置しているせいで魚を手に入れることすら難しかったが、金曜日には多くの家庭で乾し鱈を使う料理が作られていた。魚料理は一般的に軽い。このため前日の木曜日に、お腹にたまるとニョッキを食べるようになったというのである。ちなみに「土曜日はトリッパ」とは、日曜日には上流階級で祝宴がおこなわれることが多く、その肉料理用の牛などが土曜日に捌かれたからだという。そこで残された内臓が、庶民たちの食卓に回ってきたというわけである。

この説にも異論はあるようだが、いずれにせよニョッキは、今も昔も、庶民たちのもっとも楽しみな日常食のひとつなのである。

変化自在な楽しみ

そしてこの変化自在こそ、ニョッキが現在まで食べ続けられている魅力なのかもしれない。食材の違いだけでなく、同じ小麦粉とジャガイモの組み合わせであっても、その適切な割合を見極めるのは難しく（小麦粉が多いと硬くなり、少なすぎるとゆでる際に溶けてしまう）、各自好きな硬さや配分があったりする。団子状に切る際の大きさや形も異なり、ひとつひとつにフォークの背を押しつけて筋を付けたり、指で押してくぼみを付けたりもする。これはパスタにソースを絡みややすくさせる技だが、もちっとした食感が減るといって嫌う者もいる。さらには、自分のレシピが一番だと思っただけでも、元来おいしいもの好きの彼らは、知人やテレビ番



家庭で作られたニョッキ。この家では模様などを付けず、このままゆでる



家庭でニョッキを作っている主婦たち

歴史とともに

ところで、ニョッキは今でもジャガイモを主食材としているが、ジャガイモがイタリアに入ってきたのは一六世紀、さらに食材として根づいたのは一八世紀になってからである。ニョッキも、それ以前は、小麦粉のほかに食べ残りのパン、木の実の粉などをこねて作られていた。小麦粉は庶民には手に入りやすかったのだ、その分量を増やすためでもあった。

そもそもニョッキということばは、こぶを意味する語から派生しており、団子状のパスタの総称である。中世にはマッケローニという名でもよばれ、歴史はかなり古い。そして一八世紀、人口の急増や飢饉のため食糧不足が深刻になると、ジャガイモへの注目度が高まり、ニョッキにも使われるようになった。同様に外来作物のトマトも、この時期パスタソースとして普及し

組から仕入れたあらたなレシピを試すことにはやぶさかではない。そこからあらたなバージョンが生まれることもある。ニョッキと一口にいっても、じつに多様であり、人びとはそれを楽しんでいるのである。

こうしてニョッキは、今もなお、それぞれの地域・環境、歴史、習慣、そして個々人の創意工夫を絶え間なく吸収しながら、イタリア人のお腹を満たし続けている。

ニョッキ（4～6人分）ソースは別

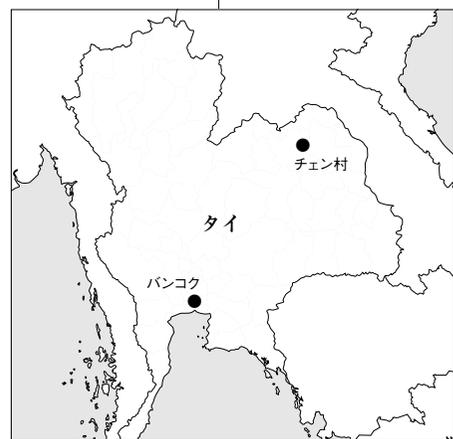
小麦粉	1kg	① ジャガイモはよく洗い、水からゆでる。ゆであがったら熱いうちに皮をむき、つぶす。
ジャガイモ	300g	② ①の粗熱がとれたら、小麦粉と適量の塩、好みによって卵黄、パルメザンチーズなども加え、混ぜ合わせ、こねる。この作業は、大きなし台の上で、小麦粉の量を加減しながらおこなう。
卵	1個	③ ②を伸ばして、指の太さくらいの棒状のものを何本も作りだし、さらにそれを2～3cmくらいの長さに切る。
塩	少々	④ ③のひとつひとつにフォークの背などで模様を付ける。③④の作業の過程では、ニョッキ同士がくっつかないよう、適宜、たっぷり打ち粉をおこなう。
		⑤ 塩を加えた熱湯に④を入れてゆでる。浮きあがってきたら、ざるにすくいあげて水気をきる。
		⑥ 別に作っておいたソース（例えばトマトソースなど）に絡めて食する。

バンチェン遺跡ブームとその後

なかむら まりえ
中村 真里絵

民博 外来研究員

ある大学院生の発見をきっかけに一躍有名となったタイのバンチェン遺跡。ブームが過ぎ去った後も村人たちの生活や記憶に深い影響を及ぼしている。



バンチェン遺跡の現在

バンチェン遺跡はタイ東北部ウドンタニ県ノンハン郡チェン村に位置する先史時代の集落遺跡・埋葬遺跡である。その歴史的価値が評価され、一九九二年にユネスコの世界文化遺産として登録された。

遺跡から出土した人骨、そして多数の土器、青銅器、指輪や首飾り等の副葬品は、チェン村のバンチェン国立博物館やポーシーナイ寺院内の遺構にて展示されている。遺物のなかでも表

面に赤褐色の渦巻き模様を施した土器は、遺跡のシンボリックな存在である。同じく世界文化遺産である中部のアユタヤ遺跡やスコータイ遺跡のような仏教遺跡と比べると、バンチェン遺跡のたたずまいはやや地味ではあるものの、歴史好きの欧米人や日本人観光客からも一定の人気があり、観光資源の少ない東北部において重要な観光地のひとつである。

しかし、この遺跡がかつて世界の考古学者や古美術商らの注



渦巻き模様を描いた土器の土産物

目を集めたことを、やってくる観光客のうちどれほどの人が知っているのだろうか。

東南アジア先史研究上最大級の発見！

この遺跡の名が広まるきっかけとなったのはハーバード大学で人類学を専攻していた大学院生のステイブ・ヤングの来訪であった。ヤングが村へ調査にやってきた一九六六年、菩提樹の根元で転んだ際に古そうな土器片を見つけた。これをアメリカに持ち帰り年代測定をしてもらったところ、紀元前四〇〇〇年もの古い値が出たことにより、世界最古級の文明発

祥の地の可能性を示す場所として、バンチェンの名が一躍世界に知れ渡ることとなった。この発見は日本においても注目され、考古学者らが東南アジア考古学に関する自主勉強会を開くようになったほど大きな出来事であった。後に遺跡が当初の指定年代より新しく紀元前二五〇〇〜二〇〇〇年以降のものと確認されると、このブームは徐々に収束していった。

ブームと村人たち

バンチェン遺跡の発見とそのブームは村人たちの生活や価値観にも影響を与えた。彼らは一七五八年ごろにフオスのシェンクワーンから内戦を逃れて移住してきたタイ系民族タイプアンの子孫である。わたしは昨年度から遺跡にかかわる村人たちの生活史の聞き取りを始めた。

かつて村人にとって遺物はそう特別なものではなかった。雨季になって雨水が表土をけずり

出すと遺物が地面から露出するため、しばしば目にしていた。しかし、バンチェン遺跡の名が知られるようになると、古美術蒐集家らが遺物を高値で取引するようになったため、村人が屋敷地から遺物を掘り出して仲買人らに売るようになった。遺物の流出を防ぐため考古学者らがその重要性を説いたが、なかなか受容されることはなかったという。しかし現在では、村人はこの遺跡の保護の積極的な担い手となっている。



世界遺産祭りの中央ステージでの再現劇の様子

バンチェン世界遺産祭り

ある村人にバンチェンのことを本当に知りたいのなら、バンチェン世界遺産祭りに来るべきだと勧められ、毎年二月上旬に開催される祭りへと赴いた。博物館の無料開放や移動遊園地、屋台、複数の特設ステージで披露される伝統音楽や舞踊、歌謡パレードの実施、一年で村がもつ



国立博物館の入り口。上には国王行幸時の写真

ともいざわいを見せるときだ。メインステージでは中高生たちが毎年決まって遺跡発見時から現在にいたるまでの村の歴史の再現劇を三晩演じる。その最大の見せ場が一九七二年のプミポン現国王によるバンチェン行幸のシーンである。ここで、国王は声のみで「このすばらしい遺産を後世に伝えるため、大切にしよう」と説き、それを村人がひざまずいて聞く。

確かにこの行幸は、一生に一度あるかないかの出来事として村人たちの記憶に深く刻まれており、調査時の話題に上がるこ

とも多い。当時、乳飲み子を抱えていたある女性は、授乳の合間に国王を一目見ようと懸命に走ったことを話してくれた。田舎の村に国王がわざわざ遺跡を見に足を運んだという事実は、村人たちにとっての遺跡や遺物への思いを特別なものにするのに十分な出来事であった。国王行幸によって遺物の売買取りがたくなかったわけではないが、祭りの会場や博物館のあちこちで目にする国王行幸時の巨大な写真ハネルが、タイ国家ならではの文化の継承のあり方を示しているような気がしてならない。

主婦と職人のあいだ——手工芸は手芸か、工芸か？

ハンディクラフト

中谷 文美 なみたに あやみ
岡山大学教授



パリの農村で毎朝立つ市場に集まる女性たち。洋装の女性が増えているが、年配者を中心に、昔ながらの腰布姿も混じる。だが、身につけるのは安物のパティックが多い。日常着用の布を自ら織ることはもはやない

「手工芸品」についてまわる「女性の手仕事」というイメージ。女性が家事や育児の合間を縫ってするものという先入観が、その労働に対する正当な評価をさまたげている。

アジア雑貨が喚起するノスタルジア

一九九〇年代後半〜二〇〇〇年代にかけて、「アジア雑貨」が日本の女性誌や通販カタログなどに頻繁に取り上げられた時期がある。なかでも伝統的な技法による染織品に注目が集まり、全国のあちこちで展示即売会が開かれもした。そういう場面で紹介される布は、製作背景にある「物語」とセットで語られ、しばしば「家族の幸せを願う心」「丹念な手仕事」といった表現で彩られていた。それらのことが喚起するのは、伝統社会の女性たちが家族の日常づかいの布製作のために時間と労力を注ぐ姿であり、自給自足的な手仕事の文化に対するノスタルジックな感情である。

じつのところ、世界各地の布づくりの現場の大半は、自給自足の文脈を離れてしまっている。もともと布は、古くから重要

中断と再開が容易な作業だと思われたからだ。

つまり、家事や育児など、家庭内責任と両立しやすい形で収入に結びつく活動に女性が従事する方法を模索した結果が、手工芸製作の奨励だった。そこで染織品に加えてかご細工、レース編みなど、さまざまな商品開発がおこなわれ、地元市場ばかりでなく、観光客向けの土産物として、あるいはフェアトレード商品として、世界市場で販売されるようになった。

手工芸品づくりは主婦の暇つぶし？

例えば、ドイツの社会学者マリア・ミースが報告している、インド南東部のレース産業の例を見てみよう。ここではキリスト教宣教師が持ち込んだレース編みが欧米市場向けの輸出産業として定着する一方、それまで戸外のレンガ造りや水路工事などの肉体労働に就いていた女性たちが、主婦として家にとどまる選択をするようになっていた。とはいえ夫の収入だけで生計を立てることは難しかったため、妻たちは一日六時間〜八時間もレース編みに費やすことになった。しかし、彼女たちの工賃は非常に低く抑えられ、また家のなかで家事と並行しておこなうという作業の特性から、まともな労働としての評価は与えられなかった。主

婦の暇つぶしというレッテルを貼られていたのである。

わたしが一九九〇年代から調査しているインドネシア、バリ島のある地域の場合、日常着の自家生産は、ずっと前に途絶えた。他方、晴れ着の一部として用いられる豪華な布の生産は村の経済を支えるまでの産業に成長した。屋敷のなかで朝から晩まで機を織る女性たちは、自分たちを主婦とはよばなかった。職業は？ と聞くと、織り職人だと答える。だが、この地域に何度も足を運び、ここで織られる布を素材としたファッションを発表しているジャカルタ在住のデザイナーは「あの人たちの生活スタイルは、職人というより主婦だね」とあつ



バリ東部の農村で、儀礼用の伝統衣装に用いられる紋織を織る女性。自分の寝室のなかや、その前に張り出したテラスに機を置いている人が多い。ほかの用事で忙しく、機織りに時間が割けない時期は、機を簡単に分解して片づけられるようになっている

な交易品でもあった。その生産には地域間分業や技術改良、地域外からの影響による素材や文様の変化などがつきものである。

「開発と女性」プロジェクトが奨励した手工芸品製作

そして二〇世紀に入ってから、いっそう空間的・文化的隔たりの大きい市場に向けた商品生産が本格化し、政府による振興策や国際機関、地元のNGOなどによる介入も活発になった。世界的に展開された「開発と女性」(Women in Development: WID)プログラムが、開発途上国の農村に暮らす女性向けの収入創出手段として、手工芸品(ハンディクラフト)製作を重視したことも背景要因のひとつである。手工芸品をつくるにあたっては、大がかりな道具と高度な技術訓練を必要とせず、家のなかででき、



村内の小売店で売られている紋織。婚礼や成人儀礼、大学の卒業式など、とくに購れがましい機会に身につける伝統衣装の一部として、都市住民が買い求める。最近では首都ジャカルタからの注文も増えた

さり言う。家事や育児の合間を縫って機に向かう様子を見てのことらしい。

手芸なるものが趣味の領域に置かれ、その作品が直接市場に出ていくことは少ないのに対し、工芸品はプロの職人の手で、売るために作られる。その意味では、インドやインドネシアの農村女性たちが生計戦略の一環として従事する布製作は、趣味のものづくりとは一線を画したものであり、彼女たちははれつきとした職人といえる。ところが、家庭内での「女性の手仕事」という位置づけが、その労働を経済的にも社会的にも正当な評価から遠ざけている。わたしたちがアジア産の布を「素朴」「ぬくもり」「懐かしさ」ということばで飾ってしまうのも、そういうまなざしのなせる業かもしれない。

手話の名前の付け方



What's in a name?

 さがら けいこ
 相良 啓子

民博 先端人類科学研究部

わたしには両親からもらった名前のほかに、ろう社会で使われる手話の名前がある。個人個人をあらわす手話の名前を「サインネーム」という。自分のサインネームを初めて見たときは、何を意味する表現なのか分からず、「その手話何？」とろうの友人に訪ねたものだ。ろう社会では、知らないあいだに中途失聴のわたしにもサインネームが作られていて、驚いた。

サインネームは、世界中のろう社会で使用されている。日常的な場面はもとより国際会議の場などでも自己紹介の際には、「サインネームありますか？ どんな表現？」というやりとりがよくおこなわれる。それは、国境に関係なく存在するろう社会共通の文化とも言える。

では、サインネームはどのように作られるのだろうか？ 一般的には、見た目の特徴やしぐさから作られたり、その人が幼いころから好きだったことがとり込まれることが多い。例えば、髪の毛の長い人には長髪をあらわすサインネームが、幼いころからマンガが大好きでいつもマンガばかり読んでいた人の場合には、「マンガ」の手話そのままその人をあらわすサインネームになったりする。

サインネームの名付け方には国によって異なる特徴もある。例えばアメリカでは、「David」なら「D」になるなど、イニシャルを使ったサインネームがかなり多いことが知られているが、日本ではイニシャルを使ったサインネームはあまり見られない。

日本では、姓の漢字をあらわした手形をそのまま使



原さんのサインネームは、同音語である「腹」から付けられ、お腹に手をあてる表現であらわされる

う場合が多く、例えば、「田中」という名前の場合は、漢字の「田」と「中」をあらわす手形をそのまま使う。また、同音語をとり入れて表現する場合も多い。「佐藤さん」なら「砂糖」、 「原さん」なら「腹」という同音語の表現がそのまま名前の手話になったりもする。ほかにも、日本手話の名前の表現には、歴史上の人物の特徴からくるものも存在する。「加藤」は「加藤清正」の槍の表現、「佐々木」は「佐々木小次郎」の背中に差した刀の表現、「斎藤」なら斎藤道三のチョビビゲの表現が、それぞれが名前の手話として今でも使用されている。

名前にまつわる手話と云えば、面白い話がある。アルゼンチン手話の教詞「7」から「19」までは、ろう学校の寄宿舎に置かれてあるベッドの番号とそのベッドを利用していたろう学生のサインネームとの関係が深いという。例えば、「7」の手話表現は、「7」番のベッドに寝ていたろう学生のサインネームをとって作られたというのだ。そのため、アルゼンチン手話の数の表現は、「数」とは関連しない独特の表現の組み合わせになった。関連して、イギリスでは、逆にろう学校の教室でいつも3番のいすに座っていたろう生徒にイギリス手話「3」のサインネームを付けたという話もある。サインネームと数の関係もまた興味深いものである。

編集後記

今号は巻頭に、19世紀中央アジアを舞台としたマンガ『乙嫁語り』を描いておられる森薫さんにご寄稿いただいたイラスト・エッセーが掲載された豪華な号となった。『乙嫁語り』はわたしも愛読しており、魅力的な登場人物を取り巻く建造物、調度品、服飾品などの緻密な描写に毎回感嘆する。その背後には、おそらく非常に丁寧なリサーチがあるのだろう、実際に何を参考資料にされているのだろう、とかねてから興味津々であった。じつはみんなぱくにも標本資料や図書の調査にいらしていたことを今回のご寄稿で知り、大変嬉しかった。

「現物には力があります」と巻頭に書いてくださっているが、みんなぱくでは大部分の標本資料が「露出展示」されているので、モノがもつ力を間近で感じることができる。刺繍の縫い、木彫りの目のひとつひとつを、ケース越しでなく間近で確かめることができるのである。

『乙嫁語り』を読んで中央アジアに憧れるけれど、なかなか現地には行く機会がないという方々、マンガに登場するような伝統的な衣装や工芸品の現物を、ぜひリニューアル・オープンした中央・北アジア展示場に見にいらしてください！ ワイルドな動物たちも待っています。(山中由里子)

- 表紙：夏の夕暮れどきにウマの群れを集める。
カザフスタン、2007年。撮影・藤本透子

次号の予告

特集

「負」の遺産

月刊みんなぱく 2016年7月号

第40巻第7号通巻第466号 2016年7月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 **国立民族学博物館**
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話 06-6876-2151

発行人 池谷和信
編集委員 山中由里子(編集長) 河合洋尚 菅瀬晶子
丹羽典生 南真木人 吉岡乾

デザイン 宮谷一欒 長岡綾子

制作・協力 一般財団法人 千里文化財団

印刷 能登印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係に
お願いします。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「万博記念公園駅(エキスポシティ前)」 「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんなぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんなぱくフェイスブック

<http://www.facebook.com/MINPAKU.official/>

みんなぱくツイッター

<http://twitter.com/MINPAKUofficial>



国立民族学博物館
National Museum of Ethnology